

《中学生の部》
佳作（警察庁交通局長賞）

愛媛県松山市立勝山中学校
1年 馬越 真那

いつか自分に返ってくる運転

「忙しいときほど、人に優しい運転をしなきゃね。いつか自分に返ってくるから。」

ある日、母のこの言葉が、私の心に深く残りました。私はその日、母と一緒に少し急いで目的地へ向かっていました。時計を見ると、予定にはあまり余裕がありません。ところが母は、横断歩道の手前で車を静かに停め、歩行者に「お先にどうぞ」と手で合図を送っていたのです。「どうして急いでいるのに停まるの」と私が尋ねると、母は笑顔でそう答えました。その瞬間、私はハッとし、何か大切なことを教わった気がしました。

毎朝、学校に向かう道で、私は歩道のすぐ横を車が勢いよく通り過ぎていくのを目にはします。雨の日には水しぶきが上がることもあります。少し怖いと感じることもあります。「大人はみんな忙しいんだな」と思う一方で、横断歩道で私たちが渡り終えるまで笑顔で待ってくれるドライバーもいます。そのような人には自然と会釈やお礼をしたくなり、心が温かくなります。逆に、険しい顔で待つドライバーには、邪魔者扱いされたようで残念な気持ちになります。同じ「待つ」という行動でも、表情や心の余裕によって受け取る印象はまったく違うのだと気づきました。

最近のニュースで、私の住む愛媛県が人口十万人あたりの交通事故死者数二.四三人で全国ワーストになったことを知りました。とても残念で、悲しい現実です。原因は様々でしょうが、私の経験からは「時間や心に余裕のない運転」が事故を招く一因ではないかと感じます。ほんの数分の遅れを気にして焦るよりも、安全で思いやりのある運転を選ぶ方が、きっと多くの命を守るはずです。

私は中学生で、世の中を大きく変えるような力はありません。しかし、家族の中から始められることはたくさんあります。たとえば、父や母に送迎してもらう時は、余裕を持った出発時間をあらかじめ決め、それを守るようにしています。前日のうちに必要な荷物をそろえ、朝の支度をスムーズに済ませるのもその一つです。また、「安全で思いやりのある運転をしてね」と声をかけることも欠かしません。こうした小さな積み重ねが、家族の意識を少しづつ変えるきっかけになると信じています。

私自身も、横断歩道を渡る際には、止まってくれたドライバーに笑顔でお辞儀をします。ほんの数秒の行動ですが、相手の気持ちを和ませ、次も誰かに優しくしようという気持ち

を生むかもしれません。そして、その優しさがまた別の人の安全運転につながり、やがて地域全体の交通安全の輪が広がることを願っています。

母の「いつか自分に返ってくる」という言葉を胸に、これからも時間と心に余裕を持ち、感謝を忘れずに過ごしていきたいと思います。